

集中力が4月とはかなり変わってきている事を実感し、この事を一つの成果として捉えるならば、テストの変容は体のみならず心を含めた変容としても捉える事ができるのではないかと中学部では結論づけた。いずれにしても大きく変容が捉えられる。

③ 意欲、態度、段階別教育内容達成評価に於ける変容

右の表は、61頁に示した、意欲・態度の調査を10月に再実施し、特に変わったと思われる姿を例記したものの一部である。我々のめざしている方向の姿がいろいろな形で表われている。①、②で述べたテスト結果に見られる身体諸機能の向上と、この意欲的姿勢の相乗作用によって、段階別教育内容の達成評価に於いても62頁の図11のT子、M子、A子の例に黒ぬり以示すように少しずつではあるが広がりを見せている。

・嫌でも声かけでがんばった。	・良い悪いの判断が
できたし、衝動的な行動が少なくなった。	
・友だちの指示が素直に聞けた。	・少しの声か
けで立ち直れた。すねる回数も少なくなった。	
・自律的にがんばる姿が多くなった。	
・日記の中に思いや要求を書きだした。	

【7】 本年度の取り組みの反省と今後の課題

リズム・サーキットの組み立て直しを含め、「楽しんで力いっぱいからだを動かす子」をどう実現していくかについて、1時間1時間の授業に視点を当て、みんなで検討し合ったり、子どもの見方や捉え方を話し合う1年だった。ふり返ってみると、今迄、指導の原則として中学部が大切にしてきた事を実践するにすぎなかった気もする。しかし、貴重な実践を積み重ねた1年だったと思う。

しかし、まだまだ課題は多い。次年度はリズム・サーキットを含め授業づくりを継続する中で、更に、次の点に目を向けたい。

- (1) どの子にも楽しんで取り組める状況の作れる教材・教具・補助具等の工夫
- (2) 単元や題材の選定及び学習内容の発展や積み上げをふまえた年間指導計画の見直し、改訂
- (3) 伸びていく子どもたちをどう捉えるか。通知表を含めた評価の方法の検討

何をするにも教師間のチーム・ワークが大切である。この事を大事にしながら、からだづくりが発達と障害に応じた教育にとって重要な働きかけである事を実践を通し、実証していきたい。

◎尚、文中の子どもたちの名前はすべて仮称であり、その発達と併せ持つ障害は次の通りである。

	発達の程度	障 害		発達の程度	障 害		発達の程度	障 害
K男	2.5～3.0歳	ダウン症	U子	5.5～6.5歳	自閉的傾向	T男	2.5～3.0歳	自閉的傾向
Y子	4.5～5.5歳	情緒不安定	R子	4.0～5.0歳	ダウン症	A子	2.0～3.0歳	てんかん
M子	6.0～7.0歳	情緒不安定	E子	3.0～4.0歳	言語障害	O子	6.0～7.0歳	自閉的傾向
S男	7.0～8.0歳	言語障害	M男	7.0～8.0歳	単純精薄	K子	2.0～3.0歳	てんかん
R男	7.0～8.0歳	CP後遺症	U男	5.0～6.0歳	ダウン症	T子	7.0～8.0歳	場面かん黙
N子	5.5～6.5歳	自閉的傾向	H男	6.0～7.0歳	情緒障害			